

果樹に尽くした人生 そして努力は果実となる

振り返ると、私の人生はずーっと「果樹」と一緒でした。
農業高校を卒業して、東京高等農林学校現在の東京農工大学に進学しました。あの頃は、東京周辺、例えば山梨とかで果樹の生産が最盛期で、けれど、専門的な技術者が全然足りなかった。だから、自然と果樹の道を選んだんです。

当時は太平洋戦争真った当中。とうとう私にも学徒出陣の召集令状が届きました。学部の仲間が出陣式をしてくれて「死ぬなよ、生きて帰ってこい！」と泣きながら見送ってくれました。ただ、私が配属されたのは敵前上陸部隊だったから、戦地に行けば全員死ぬと言われていました。ところが、その後三カ月で終戦を迎えて、本当に九死に一生を得て、生まれ変わった気持ちでした。

そこから学校に戻り、助手として果樹の研究に没頭しました。そこから熊本に戻り、家業の農家を継いだ後、その知識と経験をもっと生かしたいと思い、熊本県庁の門をたたき、農政部果樹課の職員になりました。

自宅の果樹園の栽培を始めた頃の写真。左が國重さん、右が妻の智子さん。「私が仕事で各地を飛び回っていた時、妻がずっとわが家を守ってくれてました」と、國重さんは今もなお、一緒に暮らす智子さんに感謝の言葉を贈りました。

やす おくにしげ
安尾國重さん（100歳）
大正14年11月10日生まれ



昭和と共に生まれ 百年

百年を豊かに彩ったのは 人を、花を、人生を愛する日々

生まれは熊本市、実家は「香露」の醸造元の前身である酒造業を営んでおり、その娘として育ちました。
青春時代は戦争一色で、空襲の記憶が鮮明に残っています。女性たちは旗を振って兵隊さんを戦地に送っていました。終戦後、戦争中に声高に叫ばれたことが一転して禁句となり、言葉を選んで話さなければならなかったことを覚えています。
20歳で最初の結婚をし、3人の子どもを授かりました。その頃、華道の流派「真生流」に所属、30代の頃に

は、「生け花使節団」として海外を巡りました。当時はまだ知られていなかった日本古来の文化である生け花を海外に届けることができたのは、とても有意義な体験でした。

40歳の頃、現在の「益城病院」の創設者である犬飼勝通と再婚しました。夫は元々外科医でしたが、当時は医師が少なく、何でも診なければならぬ状況でした。益城に診療所を構え、オートバイで地域を駆け巡っていた姿をよく覚えています。

地域には、生まれつきの障がいや、さまざまな要因で精神を病む人たちが多くいました。当時はまだ理解の乏しい分野でしたが、夫は「これも



100年見てきた景色

あとはもう、必死に熊本の果樹生産を盛り上げることに尽くしました。当時、甲佐町や宇城市など大規模な生産地はたくさんあったけど、やはり専門家がいなかった。県内各地で、植え付けから育成、収穫に至るまで、果樹の生産指導に駆け巡りました。
その仕事が一と段落つくと、次は県立の農業大学校を開校する話がありました。果樹専門の教授として、大学の創設に携わり、10年ほど教壇に立ち、若者の育成に努めました。
みんなの努力が実を結んで、今では熊本は果樹の大産地になりました。ミカン、梨、ブドウ…、どれも私にとっては子どものようなものです。

もちろん、私自身も果物を育てるのも食べるのも大好き。うちには600坪の果樹園がありますからね。そこで取れた果実もよく食べてます。私がこれだけ長生きできたのは、大学時代の恩師の教え。五臓六腑に異常がないか毎日触り、自ら体調管理を続けていることです。
それと何といっても、私はのんきな性分ですから。くよくよしないで酒を飲む。今でも毎日昼から日本酒を大いに楽しんでおります。
「我が人生に一片の悔いなし!」と声を大にして言いたいですが、たくさん孫、ひ孫が会いに来てくれるから、楽しみはまだこれからです。



今年の果実もよう実つとる。

いぬかい ゆきこ
犬飼由貴子さん（101歳）
大正14年4月2日生まれ

昭和40年頃、自宅のリビングルームで撮影した写真。左が由貴子さん、右が夫の勝通さん。勝通さんを慕って、多くの来客がある中、一滴もお酒が飲めない勝通さんの代わりに、由貴さんが酒の相手を務める役だったとか。

病気の一つだから誰かが診なければ」という思いから、精神科専門の病院を設立しました。
私の役割は、患者さんを支える「職員」を支えることでした。
職員こそが病院の屋台骨ですから、愛情を持って接しました。託児所なども設けていたので、当時預かっていた職員の子や孫が、現在、現役の職員として活躍していることは、私にとっても大きな誇りですね。
私の人生を豊かに彩り続けているものの一つは、やはり生け花。現在も「真生流」の指導者として後進の育成を続けています。華道においては、気取らないことが信条。はさみ一本あればどこでも花を生けられ、その季節を心ゆくまで楽しむ。難しく考えないことが大切です。
そして、毎日の晩酌も欠かせません。私は造り酒屋の娘ですから、お酒が体になじんでいるのでしょう。百年を振り返れば、つらいことや悲しいこともたくさんありました。しかし人を育て、花を愛し、それらを存分に楽しんできたからこそ、百年という月日があっという間だったな、と感じます。